

父が遺したもの

藤本 忍

心にズシンと響き、猛反省した。

「お母ちゃんを頼むで…。」
と、私の手を握り、父は力を振り絞って言った。

「心配せんでええよ。大丈夫やから。」
涙をこらえながら、私は笑顔で応え、父の細くなった手を握り返した。

そして、その数日後、父は九十二年の生涯を閉じた。七月末の猛暑の夜だった。父は、ちょうど一年前に、体調を崩して入院をした。その後も良くならず、入院生活が続き、二カ月ごとに転院を繰り返した。

私は、西脇と大阪の病院を何度も往復した。
私の子供達も、大好きなおじいちゃんのために時間を作って見舞いに行ってくれた。

お陰で、父のベッドの周りは、いつも賑やかで、笑顔が溢れていた。

しかし、コロナ禍の影響で、面会も出来なくなり、全く会えなくなっていました。何度も危機を乗り越えてきた父も、遂に力尽きてしまった。

昭和一杯生まれの父は、温厚で誰にでも優しい人だった。感情的に怒ることもなく、私は今まで一度も大声で叱られたり、手を上げられたりしたことはなかった。

私が学生の頃、友達と遊びに出かけて帰りが深夜になった事があった。玄関で心配し、叱りつける母に対して、父は翌朝、ただ一言、

「お母ちゃんに心配かけたらあかん。」
これは、堪えた。叱られるより、私の

そんな父の涙を初めて見たのは、私が嫁ぐ日だった。一人娘を見知らぬ土地に行かせるのが寂しかったのかもしれない。しかし、父は入院中、よく泣いた。見舞いの帰り際「また来るね」と言う时必须泣いた。子供の様に顔をくしゃくしゃにして泣く父を、私はそっと抱きしめた。いつも「これが最後かも。」と、別れを覚悟していたのかもしれない。

でも、私は父の前では絶対に泣かなかった。いや、「泣かない」と決めていた。父には、私の笑顔だけを目と心に焼きつけていて欲しかったからだ。だけど、病室を出ると涙がポロポロとこぼれ、一人で泣いた。

いつか父との別れの時は来る。頭で分かっているけど、その日が一日でも遠くであってほしい…。そう願わずにはいられなかった。

人間は、太古の昔から、こうして自分の親を見送ってきたんだ。皆、この悲しさと寂しさに耐え、乗り越えて生きていくんだ。

私が還暦を迎える前日、父の葬儀を行った。一緒に祝ってくれるはずの父は、もういない。

今頃、父は向こうで何をしているんだろう？ 好きな釣りを楽しんでいるんだろうか？ 「父さん、母さんの事は心配しなくていいからね。父さんから受け継いだ『人に優しくする心』と『自分の命を大切に精一杯生きる事』を守っていくからね。本当に有難う。私は、父さんの娘に生まれて良かった…。」

私は、父の遺影をそっと撫でながら言った。もうすぐ、父の四十九日の法要を迎える。